

果試ニュース

第16号 平成14年3月



愛媛果試第14号

平成13年産温州みかんは当初からかなりの豊作が予想され、奇数年に価格低迷が繰り返されていることから、国は初めて需給調整対策に取り組み、行政、農業団体、生産者が一体となって特別摘果などに取り組んできた。この結果、国が適正とした生産量にほぼ抑えることができ、さらに高品質果実が生産できたのであるが、肝心の卸売り価格は従来を表年と変わらない水準で低迷し、再生産ができる価格とはほど遠いものとなってしまった。このような厳しい中で、いかに所得を確保していくか前向きな対応が必要である。マルチによる高品質果生産、それぞれの地域で戦略品種による有利販売等がその対策の中心になると考えられ、試験場としても出来る限りのバックアップをしてゆきたい。

今回の果試ニュースは、愛媛果試第14号、キウイフルーツのかいよう病、宮内伊予柑の中間台木利用の3篇を掲載した。「愛媛果試第14号」は、昨年登録申請を行った新品種で、4月頃の有利販売が期待される。「キウイフルーツのかいよう病」は平成12年に本県で初めて確認された病気で、現在は中予地域の一部でみられるだけであるが、県下に拡散しないように注意する必要がある。「宮内伊予柑の中間台木利用」は需給バランスが崩れている伊予柑園を新しい戦略品種に更新するために、穂品種と中間台の組み合わせの適正について調査を行なったものである。このような試験は、相当の規模と年月を要するものであるが、緊急性を要するため、中間結果を掲載することとしたので、参考にしていただきたい。

場長 別府英治

「愛媛果試第14号」について

本県の気候風土に適した優良なカンキツ新品種の育成を目的として、交雑育種を続けているが、これまでに一次選抜した系統の中から今年度新たに、愛媛果試第14号を、種苗法に基づき品種登録申請した。

愛媛果試第14号はアンコールを種子親に用い、大谷イヨカンの花粉を交配して育成した、豊産性で糖度が高く、風味の良い晩生のミカン類である。

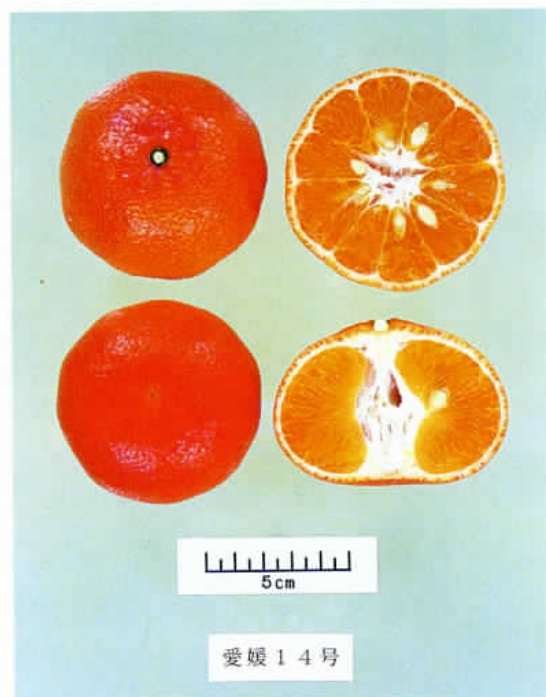
果実は約200g程度で、アンコールに似ている。果形は扁平で玉揃いがよいが、果梗部周辺が少し盛り上がり低いネックを生じる。果皮がやや硬く果実のしまりがよい。果皮の色は赤みが濃くアンコールに近いが、果皮障害の発生は少ない。剥皮性は、イヨカンに比べるとやや容易で、アンコールに由来する香りが強い。

糖度は13～14度と伊予柑に比べてかなり高く、露地栽培の果実でも、ハウス栽培のアンコールに匹敵する品質となるが、減酸は遅く成熟期は3月以降である。また、種子がやや多いが、袋はイヨカンより薄くそのまま食べられる。

樹姿は伊予柑に似ており樹勢はやや強い。

葉の形はイヨカンに比べて細長い。トゲの発生は結実し始めると少なくなる。結実性は良く豊産性である。病虫害には比較的強い。

3月以降に出荷される本県特産の伊予柑を補完する品種として期待できるので、現在現地適応性調査のための試験を実施している。



愛媛果試第14号

(主任研究員 喜多景治)

表1. 愛媛果試第14号の果実品質 (愛媛果試本場)

分析日	一果重 (g)	果形 指数	果肉 歩合 (%)	糖度計 示度	クエン 酸含量 (g/100ml)	甘味比
7.12.28	183	130	74.9	12.2	2.04	6.9
8.12.26	220	114	74.0	13.3	1.90	7.0
10. 2.20	216	123	70.0	15.7	1.89	9.2
11. 1.20	223	135	75.4	13.8	1.46	10.6
12. 2.22	190	120	74.1	13.6	1.39	11.0

表2. 宮内イヨカンの果実品質(愛媛果試本場平年値)

分析日	一果重 (g)	果形 指数	果肉 歩合 (%)	糖度計 示度	クエン 酸含量 (g/100ml)	甘味比
12.20	294	117	67.4	10.4	1.50	7.6

「宮内伊予柑」の中間台木利用について

「宮内伊予柑」は栽培が容易で外観が良く品質が優れ、愛媛の主力品種となっているが、むきにくい、じょうのうが硬い、匂がわかりにくい等から消費が減少し、価格低迷が続いている。

一方、「宮内伊予柑」より食味や食べ易さが優れている新品種が数多く開発されており、これら有望な新品種への早急な更新が求められている。

そこで、瀬戸内島しょ部の気候に適し、樹上越冬が可能で匂の異なる品種を宮内伊予柑へ高接ぎした場合に親和性や樹体の生育、果実品質がどうなるか調査を行い、更新の可能性を探った。

品種は熟期が12月の「ありあけ」、1月の「あまか」、2月の「はるみ」、「サザンイエロー」、3月の「せとか」、「不知火」の6品種を用いた。

高接ぎ4年目の「ありあけ」、「あまか」、「はるみ」、「せとか」、「不知火」の収量は宮内伊予柑と同程度確保でき、このときの果実品質は温州ミカン中間台木の場合とほぼ同じであった。ただしサザンイエローは生育が不良であった。

この結果からみると宮内伊予柑を中間台木に用いて「ありあけ」、「あまか」、「はるみ」、「せとか」、「不知火」を高接ぎ更新すること

は現在のところ可能である。

ただし台木の宮内伊予柑及び穂木ががウイルス病等を保毒していれば樹勢や収量に影響を受けることが考えられるので注意が必要である。



写真1 宮内伊予柑中間台の育成状況



写真2 はるみの高接ぎ状況

(岩城分場 研究員 薬師寺弘倫)

表1 宮内伊予柑を中間台木とした新品種の樹冠容積と収量

	樹容積 (m ³)	収量 (kg/1樹)	平均果重 (g)	果肉歩合 (%)	糖度	クエン酸 (g/100ml)
ありあけ	2.7	8.3	122	77.9	13.9	0.74
あまか	2.9	10.6	181	76.6	8.9	0.69
はるみ	4.0	11.2	129	78.9	14.2	1.32
サザンイエロー	1.7	0.0	—	—	—	—
せとか	2.4	7.5	153	86.4	13.1	1.41
不知火	3.7	12.7	199	72.6	13.8	1.45
宮内伊予柑(無処理)	3.5	11.2	287	69.9	10.2	1.45

(平成10年高接ぎ、平成13年12月13日調査)

キウイフルーツかいよう病の発生

キウイフルーツは、県内で栽培されはじめて約25年が経過し、各種病害の発生が確認されている。主要病害として、果実軟腐病、灰色かび病や花腐細菌病が発生しているが、かいよう病の発生は確認されていなかった。

ところが、平成12年にキウイフルーツの枝が枯死するとともに、葉に大きなハローを伴った褐点症状のサンプルが持ち込まれた。これらの症状から病原細菌の分離を行ったところ、緑色蛍光色素を産生しない白色のコロニーが優先的に分離された。この細菌を葉に接種して病原性を調査したところ、病原性を有していることが確認された。



図1 持ち込みサンプル

細菌はグラム陰性の桿菌で好気性、1～3本の極鞭毛を有し白色集落を形成することから、*Pseudomonas* 属と推定した。LOPAT試験の結果が+---+でI a群、緑色蛍光色素非産生、ゼラチンの液化は陰性、ソルビトールおよびグルタル酸を利用し、ファゼオロトキシンを産生することなどから *Pseudomonas syringae* pv. *actinidiae* と同定し、本病はキウイフルーツかいよう病であると判断した。これより、本県で初めてかいよう病の発生が確認された。

県内の発生分布を調査したところ、105園地中16園地（336 a）で発生が確認され、発生園はすべて標高200m以上の高い所であった。

このような発生は、静岡県や神奈川県でも同様に認められている。発生市町村は現在のところ、松山市、伊予市、砥部町の3市町村であるが、同様の症状が発生している園があれば試験場まで御一報願いたい。

本病の有効防除法については、今後検討する予定である。



図2 発生状況



図3 枝の枯れ込み状況
(枝に亀裂が入り、樹液が出る)
(病害班 主任研究員 三好孝典)

編集発行 愛媛県立果樹試験場
〒791-0112
松山市下伊台町1618
TEL 089-977-2100
FAX 089-977-2451